

出エジプト記 24章12-16節
フィリピの信徒への手紙3章7-14節
マタイによる福音書17章1-9節

先週は、2023年の「堅信受領者総会」を3年ぶりに対面式で行うことができました。ご協力ありがとうございました。一般の暦はすでに2月の中旬です。教会歴は大齋前主日とあります通り、今週大齋始日を迎えます。

本日の「旧約日課」は、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らを教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける」(出エ24:12)とあり、モーセが、主なる神様の教えと戒めを記した板を授けられるために、山に登る個所です。この出来事が示すとおり、モーセは、出エジプトを率いたイスラエルの指導者であると同時に、主なる神様の言葉を受け、さらに教えの言葉を受けて、民に伝える役割も担っています。モーセは、政治的・軍事的指導者であると同時に、預言者でありまた律法を解釈するものでもあるのです。本日の福音書は、特禱に「神よ、あなたはその独り子の受難の前に、聖なる山の上でみ子の栄光を現されました」とある通り、イエス様の姿が山で変わったという物語、いわゆる山上の変貌の箇所ですが、そこではこのモーセが現れます。そしてエリヤも現れるのです。

エリヤは、イスラエルの預言者の一人です。世界史的な年代推定では、モーセよりも4～500年後の存在です。バアルの預言者たちとの戦いなど活動面で多くの物語が『聖書(旧約)』に残っている預言です。そして、彼の最後は、「エリヤはつむじ風の中を天に上って行った」(列王下2:11)とある通り、天に昇って死を迎えていません。そこから、マラキ書では「大いなる恐るべき主の日は来る前に私は預言者エリヤをあなたがたに遣わす」(マラキ3:23)と記され、イエス様の時代には、イスラエルが困難に直面した時、エリヤが再び到来するという期待もありました。これらのことからモーセとエリヤは、イエス様の時代のイスラエルの人々にとって、過去、現在、未来の出来事に関わる重要な預言者でした。

本日の福音書の物語は、イエス様が、山に登られると、三人の弟子たちの見ている前で、顔は太陽のように輝き、また服は光のように白くなり、この二人と語り合っていたと告げます(マタイ17:2-3)。これらの描写は、先に見たモーセの物語に類似しています。イエス様にもモーセと同じようなことが起こったと示そうとしているように思えます。また、エリヤの存在は、イエス様がエリヤと同じように戦う預言者であるかのようにも予期させます。しかし、この出来事が示す事柄は、イエス様が、モーセとエリヤ以上の存在であるということです。しかしながら、この物語の登場人物であり目撃者として描かれている三人の弟子たちは、そのことを理解しませんでした。ペトロは、「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです」(マタイ17:4)と語るのですが、それは彼の誤解を示しています。仮小屋とは幕屋であり、主なる神様が臨在する場所、あるいは聖所とも礼拝する場所とも言えます。ペトロは、イエス様とモーセとエリヤを同等と考えたのでしょう。

本日はマタイによる福音書に描かれたイエス様の山上の変貌の出来事に触れていますが、その基となったマルコによる福音書とも比較しながら考えたいと思います。マルコでは、ペトロの先の発言の後、「ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟

子たちは非常に恐れていたのである」(マルコ 9:6) と弟子たちの理解のなさを強調されます。そしてそのあと「これはわたしの愛する子。これに聞け」という声を彼らは聴くのですが、マタイでは話の展開が異なっています。「分からなかった」とまでは書かれてなく、ペトロが先の発言をしている間に「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(マタイ 17:5) という声が響きます。そしてその言葉を聞いたあとで「弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた」(マタイ 17:6) となっています。マルコでは、弟子たちの無理解をただすかのように、天から主なる神様の声が響くのですが、マタイでは天からの主なる神様の声が響き、弟子たちは誤解から解かれたかのように描かれているのです。

しかしながら、マタイもマルコもこの出来事の後、「一同が山を下りるとき、イエスは、『人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない』と弟子たちに命じられた」(マタイ 17:9) となっており、この点は、同じです。つまり、山上の変貌の出来事を十字架と復活と結び付けて理解することの大切さを語っている点は共通しているのです。ただし、マルコはこの後も弟子たちのイエス様への無理解は深まっていき、弟子たちが離散したままで物語が終わるのですが、マタイは異なっています。復活のイエス様に出会った 11 人の弟子たちが宣教に派遣されることで物語が終わります。その点では物語の終わり方がかなり異なっています。

福音書の終わり方の違いを先に触れてしまいましたが、本日の物語は、マルコとマタイでは全体における意味づけも異なります。マルコでは、物語全体のほぼ中央に位置し、この出来事を転換点として、弟子たちのイエス様に対する誤解がより深まります。しかし、マタイでは、すでにペテロについて「わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」とあり(マタイ 16:18-19)、弟子たちは教会の職務を託されています。この後のお話の流れで弟子たちは、マルコにある物語と同じように、イエス様の逮捕の際に逃げ去ってしまいますが、復活のイエス様に出会い、その本当の意味を理解して宣教へと遣わされた人々であり、今もある教会の礎となった人々であることが、すでに告げられているのです。マルコにおいては、弟子たちの誤解が強調されていますが、マタイではそのことを受け継ぎつつも、しかし、弟子たちは十字架の意味を知り、復活のイエス様に出会い立ち返り、教会を大切にしたい人々である、そのようにも描かれているのです。

マタイの記述から、今日のわたしたちがこの物語から学ぶことも同じです。それはイエス様を通して主なる神様が示された輝きをどのようにとらえるかということです。同時に、わたしたちは、それを弟子たちと同じように見間違ってしまうことがある、そのことを深く自覚することです。自分たちの知識や理解に従って、都合のよいあるいは好む事柄をそれと誤解してしまう可能性があるということです。そのような事柄を防ぐ手立て、それがわたしたちにとってはイエス様の十字架にほかなりません。

今週水曜日から大斎節に入ります。大斎節は、もう一度イエス様の十字架の意味を深く味わい理解し、自分の歩みを考える時です。それは毎年来る事柄ですが、世界がまことの平和になるために、わたしたち一人ひとりが、そして教会全体が忘れてはならない出来事をもう一度思い起こす時です。それは、わたしたちの一人ひとりが、イエス様の光を通してまことの慰めを得るためです。そして、わたしたちの教会を通してイエス様が輝くためのです。そのために、今年もイエス様の十字架の出来事を改めて深く見つめたいと思います。